

# HEPATOLOGY NEWS

## 肝胆膵病態内科学ニュース

第8号 2011年7月 発行

### 巻頭言

頭に際して、東日本大震災でお亡くなりになりました多数の方にお悔やみを申し上げます。また、被災され、今も続く原発事故などの影響で避難を余儀なくされている皆様に心よりお見舞い申し上げます。

予期せぬ大震災で医療医学分野も多くの影響が出たわけですが、ようやく日々のリズムが回復してきた感があります。学会も4月はほとんどが中止・延期となりましたが、5月に入って予定通り開催される状態へと戻ってきました。

さて、平成23年度はじめての Hepatology News をお届けしたいと思います。肝胆膵内科には3名の新入局者があり、大学内で、あるいは、総合医療センターで研修を開始しています。また、一緒に研究を開始してくれた方、肝炎センター・医局運営に貢献していただける新たな人材を得、気分一新して新年度のスタートをきりました。教員の中では小林佐和子先生が国立癌研究センターへと内地留学に出かけました。複雑化する癌診療のエッセンスを学んできて欲しいと思っています。

2週間前に行われた日本肝臓学会では当科から実に多くの発表をすることができました。大学院生のような若手が堂々と口演をする姿を見ると頼もしくさえありました。若手が躍動すると活力をもらえます。

時代はポストゲノム。次世代シーケンサーを用いて得られたデータがトップジャーナルを賑わせています。

米英で開発されているシーケンサーを用いればヒトのゲノム全体を瞬く間に解読してしまう時代に突入しました。DNA, RNA, microRNA, エピゲノム。ヒトに接している医師こそが本領を発揮できる時がきたとも言えます。阿倍野の街も大きく変わろうとしています。電車通りに接してこまごまとした店がたくさんありましたが、今や若者向けのショッパが入るモール街へと変身しました。高さ300メートル日本一の超高層ビルが天王寺駅前にそびえ建とうとしています。

世は震災からの復興に向けて歩み始めています。肝胆膵内科はもとより市大病院全体が時代の潮流を創造すべくアグレッシブに活動する事を期待したいと思います。

(河田則文)

### Contents

巻頭言	1
病院講師 着任挨拶	2
新入局員紹介	2
その他 スタッフ紹介	3
被災地救護活動に参加して	4
謝辞	6
お元気ですか?	7
大阪市立大学医学部 附属病院肝胆膵内科 外来表	8
編集後記	8





## // 病院講師 着任挨拶

病院講師

川村 悦史

(かわむら えつし)



**平** 成23年4月より病院講師となりました。

大学院、研究医時代は塩見教授の核医学教室で消化器画像を勉強させて頂きました。貴重な経験でした。現在、臨床は肝臓の局所治療、研究は画像診断をテーマにしたいと考え

ています。

局所治療について、RFかPEIか、どのラインで何回穿刺するかといった治療戦略が正しくできるよう努めています。安全な治療と術後、少しでも多くの肝予備能保持ができるように考えています。画像研究は、主に超音波とFDGPETを使い、肝臓の病期と治療効果の評価に生かせたらと考えています。先輩方が築いてこられたものを発展させ、河田教授のもとで肝胆膵内科の歯車のひとつになれば、と思っています。

## // 新入局員紹介

西尾 知香

(にしお ともか)



**本** 年度より大阪市立大学肝胆膵内科に入局させて戴いた3年目の西尾知香です。

大阪市立大学医学部を卒業し、1年目は大野記念病院、2年目は大阪市立大学医学部附属病院で研修を受けさせて戴きました。肝胆膵内科に入局を決めた理由は、もともと消化器疾患に興味を持っていたこと、医局の先生方がとても親切でアットホームな雰囲気であったこと、女性にとってずっと続けやすい科ではないかと感じたこと、などです。肝胆膵内科では、結婚・出産後も大学で仕事を続けている先生もいらっしゃるの、できれば仕事を続けたいと考えている私には合っているのではないかと考えました。今後は消化器全般を学びつつ、肝胆膵疾患の知識を深めていけたらと考えています。ご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、今後ともよろしくお願い申し上げます。

小田桐 直志

(おだぎり なおし)



**本** 年度より前期研究医として入局させていただきました、小田桐 直志です。

研修医1年目は大阪市立大学医学部附属病院、2年目は府中病院で研修させていただきました。かねてより消化器系に興味があったのですが、肝臓を診ることのできる消化器内科になりたい、腹部超音波検査を用いた診断・治療の技術を身につけたいと思い、肝胆膵内科への入局を決意しました。先の長い道のりと思いますが、まずは一般的な消化器内科医としての臨床力を身につけるべく、一つ一つの臨床経験を大切にして学んでいきたいと思っております。至らぬところばかりで、先生方には御迷惑をおかけすることも多々あるかと思いますが、今後とも御指導の程よろしくお願い致します。



## 上野 綾子

(うえの あやこ)



**は**じめまして。今回大阪市立大学肝胆膵内科に入局させていただきました、上野綾子です。出身大学は奈良県立医科大学で、初期研修は大阪市大とペルランド病院でおこなっていました。肝胆膵内科には初期研修1年目の4月にお世話になりました。臨床的に興味深いだけでなく、指導して下さる先生方もたくさんおり、医局の雰囲気もいいことが決め手になりました。まだ右も左もわからない状態で迷惑かけっぱなしですが、精一杯努力していきます。今は総合医療センターで研修していますが、今後大学に帰った際はぜひよろしく願いします。

## // その他スタッフ紹介

研究員

## 松本 佳也

(まつもと よしなり)



**大**阪市立大学大学院生活科学研究科修士2回生の松本佳也と申します。管理栄養士として杉本町キャンパスの羽生大記教授の研究室である栄養医科学研究室に在籍しており、羽生教授から河田則文教授の研究室を紹介していただき、今年の1月よりお世話になっております。今年4月に転勤なさった小川智弘先生の、NASHモデルのウサギを用いた研究を引き継がせていただき、現在『L-オルニチンによるNASHの予防効果の検討』という内容の研究をさせていただいております。大学では臨床研究を行っておりましたので、実験等は初心者で、研究室の皆様にはご迷惑をおかけしておりますが、周りの先生や研究者の方々から学ばせていただくことがたくさんあり、学生のうちからこのような体験をさせていただき、自分は幸せ者であると思っております。研究以外でも、病棟の回診やNSTカンファレンスにも参加させていただいております。また、こちらでも先生方にお世話になりますが、よろしく願いいたします。

研究員

## 谷川 葉子

(たにがわ ようこ)



**私**は最初から生物の仕事に携わっていたわけではありません。もう25年程前になりますが国立精神・神経センターで筋肉の研究をしていた鍋島陽一先生の研究室で実験のお手伝いをする事になりました。そこで細胞培養やプラスミド精製等を教えていただき実験の第一歩を踏み出す事になりました。以来、理化学研究所や科学技術振興財団等の研究室で様々な実験技術を学ばせていただきました。現在のテーマはアフリカツメガエルのCytoglobinの機能解析を中心にフロー培養の技術開発を行なっています。私はこれまでの技術を生かして実験をする事しかできませんのでとにかく身体を動かしていきたいと思っています。趣味はテニス、スキー、カヌー等アウトドア派です。今まで様々な研究所の先生方とテニスを楽しんできました。テニスをやられる方はぜひお手合わせをお願いいたします！



研究補佐  
齋藤 亜美  
(さいとう あみ)



**2** 011年3月より肝胆膵病態内科学教室で勤務させていただいております。慣れない仕事でご迷惑をおかけすることもあるかと思ひます。まだ右も左もわからない未熟者でございますが、ぜひ厳しくも温かいご指導をお願い致します。教授、先生方、研究員の方々が築いてこられた歴史と伝統に恥じぬよう、また自分らしさを忘れない志を持って、日々精進してまいります。どうかご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

臨床検査技師  
村上 郁子  
(むらかみ いくこ)



**2** 011年4月より肝炎センターで院内血液汚染事故(針刺しなど)の対応、免疫抑制剤使用時のB型肝炎再活性化調査、小児科からの母子感染調査(C型肝炎)などを行っております。

臨床検査技師  
安原 洋子  
(やすはら ようこ)



**2** 011年5月より、病院内にて勤務させていただいております。主な業務は、院内感染事故の対応や肝炎関係の職員健診、ワクチン接種の補助などに従事しています。まだまだ勉強中ではありますが、日々がんばっていきたいと思っております。

## 被災地救護活動に参加して

**東** 日本大震災において、お亡くなりになられた方々に対して深い哀悼の意を表すとともに、被災された方々に謹んでお見舞いを申し上げます。

私は4月8日～11日の4日間、岩手県大槌町の安渡小学校を拠点とする救護活動に参加する機会を得ました。当院と市立総合医療センター他による大阪市の被災地医療支援活動は、震災の翌3月12日に救急部を中心とする第1次DMAT(災害派遣医療チーム)隊の茨城県常陸大宮への派遣を皮切りに始まり、大槌町での救護活動は3月21日からの第一次班の派遣から始まり、医師2名、看護師2名、事務(ロジスティック)1名からなる1グループが4

肝胆膵内科 榎本 大

日間を任期として交代制で継続的に任務に当たりました。大槌町は釜石市の北に位置し、震災前には水産業を中心とする人口約1万5千人の小さな町でした。今回の地震による津波では町長さんもお亡くなりになり、役場も流され行政機能が失われるなど壊滅的な被害を受け、5月29日現在の新聞発表では772の方が犠牲となり、約950人が行方不明で、依然として約5,310人が避難生活を余儀なくされています。

私が参加した第7班は、老年神経科の武田景敏医師、眼科病棟の折部直江看護師、脳外科病棟の木村香織看護師、臨床検査部の尾嶋文人技師と私からなる5名のチームでし



た。出発当日は7:25に伊丹を発ちましたが秋田空港着の便しか取れず、秋田から現地まで車で5時間強かけての移動となりました。片道約7時間の行程のため現地での引き継ぎが出来ず、途中の遠野の道の駅で第6班と落ち合い、約1時間の申し送りを受けました。ここではタブレット型端末を用いて途中の道順や現地の様子を動画で見せて頂き、お陰さまで道に迷うことなく現地に入り、比較的スムーズに診療を開始することが出来ました。夜は市立総合医療センターのチームが活動していた釜石市の栗林小学校で合同ミーティングを行い、寝食を共にしました。ミーティングでは重症患者の受け入れ可能な病院や感染症の流行状況についての情報を共有し、食事はカップ麺やレトルト食品に加えてロジスティックさんたちが大鍋で豚汁などを作って下さり、毛布数枚を割り当てられて10時頃には皆クタクタになって小学校の教室でザコ寝状態、朝は凍えながら日の出とともに起床、そんな学生時代のクラブの合宿のような生活の中で、経験したことのない強い余震が繰り返される不安も手伝って、不思議な連帯感が生まれ貴重な体験をさせて頂きました。このように多くの方々の献身的な協力のお陰で、私も何とか4日間の任務を遂行できたことを、この場を借りて御礼申し上げます。

安渡小学校での活動は教室の片隅に設置した急造の診察室で、午前約30名、午後約10名の受診者に対応し、合い間に保健室で休んでおられる高齢者や要請があれば近隣の避難所へ往診しました。血液検査やレントゲン撮影は出来ず、せいぜい血糖測定器、血圧計、体温計、パルスオキシメーターが頼りの診療です。一般的に災害医療の急性期においては、救急科を中心とする救命処置や外科による外傷治療が中心となります。ところが日が経つにつれて高血圧、糖尿病などの慢性疾患に対する内科治療と、そのための薬剤の確保が重要となります。実際、我々の受診者も薬の処方をお求めの方が大半でした。また避難所での生活では不眠、便秘、感冒症状を訴える方が増え、インフルエンザ、ノロウイルス

スなどの感染症を蔓延させないためのマスク・手洗いの励行、トイレの整備が急がれます。安渡小学校では初期に派遣された方々が診察室の設営や内服薬・注射薬の手配にご苦労され、また保清に関する啓蒙をされたお陰で感染症の流行はみられませんでした。逆に我々第7班は最終班となったため撤収に関する調整に当たりました。具体的には患者さんの申し送りや現地に持っていった大量の薬について、多くは自衛隊の医官の先生が引き継いで下さいました。また被災者の方々やご協力頂いた地元の医師・薬剤師へのご挨拶、後片付けなど、後を濁さず発つことに気を配りました。最終日、我々が発つ時には避難所の運動場に被災者の方々が集まって暖かく見送って下さり、これは第6班までの方々がご苦労された結果と胸が熱くなりました。

4月11日の帰路、遠野市の温泉に立ち寄り4日ぶりの風呂に入りました。その日は震災からちょうど1ヶ月目だったので、14:46には岩手県下では皆で黙祷することになっており、我々も風呂場で黙祷しました。運転手さんに「4日ぶりの風呂でした」と言うと、「私らはまだ週1回です」と笑顔で仰いました。被災地の方々の苦悩はまだ続いています。





## // 謝 辞

当科にてC型肝炎の治療をさせていただいた池本信子様から、教育研究奨励寄附金を頂戴いたしました。ここに、その崇高なるお志に敬意を表し御礼申し上げますとともに、医局員一同、医学・医療の向上に鋭意努力することをお誓い申し上げます。

なお、池本様からは、心温まる、また大変勇気づけられるお手紙を頂戴しましたので、ここにご紹介させていただきます。

### 「小林先生と出会って」

池本 信子様（高知県）

**C**型肝炎を患って20数年。ペガシス接種でやっとウイルスが消えた。接種終了後8ヶ月が過ぎた今、ウイルスは検出されていない。

点滴治療に毎日通っても下がらない肝機能数値。だるさ・倦怠感、肝硬変や肝がんへの不安・恐怖を抱きながら何年も通い続けた。

最初のインターフェロン治療は激しい下痢の副作用に悩まされ、途中で断念した。

堪らない疲労感で仕事を辞めざるを得なくなった。そしてまた点滴治療に通い始めた頃、小林佐和子先生と巡りあった。

笑顔を絶やさず、簡潔でわかり易い説明をされた。治療を薦める時、私の気持や考えを受止め、疑問や質問に丁寧に答えられた。

先生と共に自分で治療法を決断した気持を持つことが出来た。この事は厳しい副作用に耐える気力や失望・落胆・希望と揺れ動く気持を自制する力になった。勿論、家族の

全面的な支えがあったの言うまでもない。

2006年11月20日から2007年10月17日までペグイントロンとレベトール併用療法を受けた。

体力の回復を待って2008年3月26日よりペガシスを接種した。5回目の5月21日にウイルスが陰性になった。

インターフェロンの種類、投与量、投与期間などの研究が進み、薬との併用や長い期間少量投与が可能になっていた。

血小板や白血球の減少が著しく、治療の中断もあったが許容期間いっぱい少量接種が私のウイルス性肝炎を救ってくれたのだ。ペグでウイルス量が減っていたことも良い結果につながったのだ。

先生は転居先の高知での医療機関も探して下さった。市大で受けていた治療を高知でも継続して受けることが出来た。高知と大阪の両先生の連携を有難く思っている。

治療終了7ヶ月後の診察で我事のように喜んで下さった先生の姿が忘れられない。



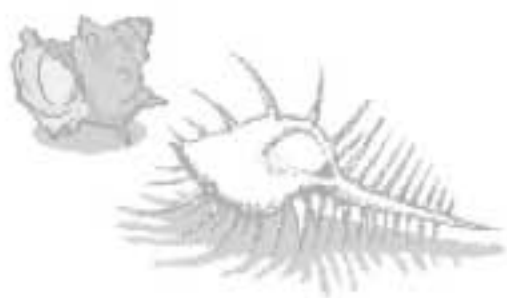
## お元気ですか？ ～OG・OBからのお便りコーナー～

近畿大学工学部着任のお知らせ

小川 智弘

**皆** 様、ご無沙汰しております。今年の3月まで肝胆膵病態内科研究室で博士研究員をしていた小川です。4月から大阪を離れ、広島にある近畿大学工学部で助教として勤務しています。近大工学部がある東広島はもともと大学時代に住んでいた町なのですぐに慣れましたが、車がないととても不便な町です。大阪での生活が長かったので、そのギャップがすごくあります。私の大学での仕事は、主に生物学や理科教育を教えています。これまで、研究ばかりで教壇に立ち授業をした経験がなかったので、初めは自分が何をしゃべっていて、何をしているかわからなくなり戸惑っていました。今は少しずつですが、授業として成り立っているのでは(?)と思っています。ただ、よく理解している学生と理解していない学生の差が激しく、個々の力

を延ばしてあげるのが今後の課題です。研究環境はこれまでと違って決して充実しているとはいえませんが、これまで培ってきたスキルを活かして、引き続き肝臓の研究を続けています。これからも学会等でお会いする機会がたくさんあると思いますが、その時は一声おかけください。皆さんにまたお会いできる日を楽しみにしています。





## 肝胆膵内科 トピックス【2011】

- May 18: 森元研究員の NASH 組織と弾性度に関する論文が Hepatology Res に accept されました
- May 17: 学振基盤 C (新規), 若手 B (新規) が採択されました
- May 6: 大学院生山口康徳先生の愛隣地区における HCV 感染に関する論文が Hepatology Res に accept されました
- May 2: 榎本准教授が「日本肝臓学会研究奨励賞」を受賞する事になりました
- May 2: Le 研究員の Cytoglobin に関する論文が Am J Pathol に accept されました
- Apr 19: Le 研究員が日本肝臓学会 Travel Award を受賞しました
- Apr 11: 文科省新学術領域 (新規), 学振基盤 B, C (継続), 若手 B (継続), 挑戦的萌芽 (継続) が採択されました
- Mar 19: 森川浩安講師の脂肪肝に関する大阪府大との共同研究がキャノン財団研究助成に採択されました
- Mar 3: AASLD 前会長の SL Friedman 教授によるセミナーを開催しました
- Feb 10: 榎本准教授らの核酸アナログ製剤に関する総説が日本消化器病学会雑誌に掲載されました
- Jan 27: 河田教授が「おはようパーソナリティー道上洋三です」に出演しました
- Dec 24: 教授河田則文氏の肝線維化に関する Review (総説) が Hepatology Res に Accept されました
- Dec 22: 准教授田守昭博氏の B 型肝炎再活性化に関する論文が J Gastroenterol に Accept されました

## 大阪市立大学医学部附属病院 肝胆膵内科 外来表

	月	火	水	木	金
1 診	河田 則文	田守 昭博	森川 浩安	河田 則文	田守 昭博
2 診	榎本 大	岩井 秀司	岩井 秀司	榎本 大	藤井 英樹
3 診	藤井 英樹	川村 悦史	川村 悦史	萩原 淳司	萩原 淳司
4 診				遠山まどか	

## 編集後記

Hepatology News 第8号をお届けします。  
 今年度は桜の下での集合写真ではなく、新緑の中です。  
 肝胆膵内科として5年目を迎えます。新たな芽、新たな力が  
 育っています。 (H・M)

## HEPATOLOGY NEWS

肝胆膵病態内科学ニュース

第8号 2011年7月 発行



発行者 / 大阪市立大学大学院医学研究科  
 肝胆膵病態内科学  
 〒545-8585 大阪市阿倍野区旭町1-4-3  
 TEL: 06-6645-3811 FAX: 06-6645-3813  
 編集委員 / 森川 浩安